

# なぜ、現在の高校生はラグビーを選ばないのか

## Why high school students don't participate in Rugby clubs?

1K11C187 倉橋 慎太郎

主査 木村和彦 先生

副査 原田宗彦 先生

### 【目的】

日本ラグビーフットボール協会は、戦略計画 2010 - 2019 の中で、「『ラグビーファミリー』を増大させる」ことを目標に掲げている。ラグビーファミリーを増大させるためには、根本となる「競技人口の増加」が課題と考えられる。しかし、競技人口で最も多くの割合を占める高校ラグビーにおいて競技人口の減少が著しいという現状にある。

また、ラグビーは長年の競技歴がなくとも、日本代表選手になることができる。日本代表 2014 年度選手名鑑に掲載されている選手を見ると、42 名中、10 名が高校からラグビーを始めている。高校生ラグーマンを増やすことは、ラグビーファミリーの増大だけでなく、日本の競技力の向上にも大きく繋がってくるのである。

そこで、本研究では、過去と現在でのラグビーを取り巻く環境の違いから「高校ラグビー人口減少の原因」について検討を行い、「高校ラグビー人口減少を食い止めるための解決策」を考えていく。

### 【方法】

全国高等学校体育連盟のラグビー競技加盟者数が多かった平成 2, 3, 4 年度から高校でラグビーを始めた 4 名、平成 23 年度以降から高校でラグビーを始めた 4 名の計 8 名を対象にインタビュー調査を行った。

インタビュー調査の具体的な方法としては、調査対象者の経歴、ラグビー競技開始動機について、ラグビーとの接触機会について、ラグビーに対するイメージについて、高校生ラグーマン減少の要因について、高校生ラグーマン減少を食い止める解決策について、半構造化インタビュー方法を用いて質問を行った。

データの分析方法は、川喜田 (1967) による KJ 法を用いて行った。

### 【結果】

KJ 法による分析の結果、過去の競技開始に影響する要因については、「他者からの影響」、「メディアからの影響」、「直接の接触」、「親のプラスイメージ」、「紳士のスポーツであるイメージ」、「紳士のスポーツでないイメージ」、「人気」、「日本代表への失望」の 8 つの下位概念が構成された。

それらの下位概念をさらに、「直接的な周囲からの影響」、「自分自身の経験」、「ラグビーに対するイメー

ジ」、「国民のラグビーに対する関心」の 4 つの上位概念として集約した。

そして、現在の競技開始に影響する要因については、「他者からの影響」、「勧誘」、「直接の接触」、「親のプラスイメージ」、「親のマイナスイメージ」、「紳士のスポーツでないイメージ」、「世間一般のマイナスイメージ」、「人気」、「不人気」、「日本代表への期待」、「世界大会の話題」の 11 の下位概念が構成された。

それらの下位概念を過去の競技開始の影響する要因同様、「直接的な周囲からの影響」、「自分自身の経験」、「ラグビーに対するイメージ」、「国民のラグビーに対する関心」の 4 つの上位概念として集約した。

### 【考察】

研究の結果、高校ラグビー人口減少の原因が明らかになった。まず、1 つ目は「ラグビーのメディア露出機会の減少」である。過去では、高校からラグビーを始めるより前にメディアからの影響を受けている人が多かったのに対し、現在では、メディアからの影響を受けて、ラグビー部に入部した人は 1 人もいなかった。

そして、2 つ目は「ラグビーとの直接の接触機会の減少」である。過去では、小学生、中学生の頃からラグビーを体験する機会が多かったのに対し、現在では、その機会がほとんどないことが分かった。特に、必修クラブ廃止は貴重なラグビーの経験の場を奪う結果となった。

さらに、3 つ目は「ラグビーに対するイメージの悪化」である。特に、親のイメージが過去と現在で大きく変化していることが分かった。現在は、多くの親が危険、怪我などのマイナスイメージを持っているという現状が明らかとなった。実際に、現在において、親のマイナスイメージが原因となって、ラグビー部の入部を諦める子どもが多いことがインタビューの結果から分かった。

上記の原因を踏まえ、導入として、まずは、タグラグビー、タッチラグビー、セブンスを普及させることが高校ラグビー人口減少を食い止めるための解決策と考えた。これらはランニングプレーが中心となるため、危険、怪我というマイナスイメージを抱かせることなく、ラグビーに親しむことができる。ラグビーに親しむ人が増えれば、メディア露出機会も増える。そうすることで、高校ラグビー人口は増加していくのではないだろうか。